門痘瘡を憂ひて去二十一日死しぬ。明二十八日親里へまかるよし聞侍りけるに、雨さへそぼふりけるまゝ、侘しさもいとゞ思ひやられて、申つかはしける。

おもひやる袖だに露のひまぞなきこの夕暮の雨の名殘を

また短冊に書て指添へ侍りける。

咲花のよすがと待し春雨をなき名しのぶの枯葉にぞみる

又不幸の事いひなぐさめるとて、此歌の趣觀念すべしとて書ておくり侍りける。

津の國の難波の春は夢なれやあしの枯葉に風わたるなり

一、定家卿の机の模形に

二月望。先年淺井政右在京の日、定家卿の机の形模し置、今菊池武康の許に有之由傳聞之、去頃令借用。則白桐を以て模之、小倉山時雨る頃の歌の躰令畫之。今夕其裏に愚詠一首書之、頗卒爾の儀多罪多罪。

小倉山もみぢばうすきたもと哉時雨ふりゆく秋を思へば

一、幽栖の月を

二十二日。此ほど幽栖月といふ題にて。

光なき谷とてむすぶ柴の戸をいかに雲井の月はとふらん

一、觀月亭の梅を

二十四日。今朝觀月亭より梅の咲たる梢を詠居て、思ひつゞけける。

塵の世と思ひなすてそ咲梅の色香はさても變らざりけり

一、社頭松

二十五日。

春日侍聖廟詠社頭松和歌

わきていま春にもよらずみづ垣に音なき松の色の長閑さ

一、對花述懷

三月二日。觀庭際之花綴述懷之一首

對花述懷

住はてむ身とも思はぬ世の中に昔は花をうゑてけるかな

此歌直清へ送りける處、左の一絶惠來。

酬藤有禎對花述懷和歌　鳩巣

滿城桃李路塵中。靜處看花自不同。月夜清香須愛翫。明朝亂落任春風。

一、鶯を聞いて

五日。今朝鶯を聞付て。

かすみたち雨うちそゝぐ呉竹のしづけきかげに鶯の鳴く

一、寛梅漸く散る

七日。寛梅は漸く散り、櫻は漸く咲初め侍りけるを見て。

心なき草木も時はしるものをあはれつれなき人の世の中

一、觀月亭に花を見て

八日。今朝於觀月亭閑に花を看て侍りけるに、何となく世の中も、今はとなげかるゝことの侍りけるまゝ。

春すぎて深き綠にまじりなばあたら櫻も名をやけがさん

一、再び對花述懷

九日。今朝又於觀月亭對花述懷。其辭云。

生涯忠思一封書　生前憂樂一朝花

思ひおく方こそなけれ塵ひぢの世に似ぬ花を打詠めつゝ

予仕官二十有一年。於今自初事我公。至于今日而日記不怠。今有所思以闕筆畢。

元祿六年癸酉三月九日　藤原昌興

右葛有禎日記。自延寶八年庚申。至元祿六年癸酉。凡十四年事拔粹鈔之。一百二十有一張紙也。有禎爲人也。志操高潔。有古烈士風。獲罪於公家。禁錮於寺西若狹家數日。遂竄于能州海濱。其事在人碑。不贅于此。日記中多散樂事。且遙佛歌詠除之。蓋我先師鳩巣先生故人也。故其唱和多有焉。所以余常嘉尚也。其所友者竹田忠張・菊池武康・山本基庸亦皆余丈人行也。嗚呼痛哉。

元文二年陽復月望後一日　浚新誌